



Data

監督: ジェームズ・アイヴォリー
 原作: E・M・フォスター『ハワーズ・エンド』
 出演: アンソニー・ホプキンス / バネッサ・レッドグレイヴ / ヘレナ・ボナム＝カーター / エマ・トンプソン / ジェームズ・ウィルビー / サミュエル・ウェスト / ジェマ・レッドグレイブ / プルネラ・スケイルズ

■ショートコメント■

◆1993年の第65回アカデミー賞で作品賞を含む9部門にノミネートされ、主演女優賞（エマ・トンプソン）、脚色賞、美術賞を受賞した名作を4Kデジタル・リマスター版ではじめて観賞。原作はイギリスの作家E・M・フォスターの『ハワーズ・エンド』だが、寡聞にして、私は原作もこの映画も全く知らなかった。

予告編を2、3回観る中、「これは必見！」と判断し映画館へ行ったが、小さな劇場で、しかも、観客は合計5名。これは一体ナニ？しかし、映画はやはり相当なもの！

◆チラシによれば、本作のポイントは次のとおりだ。

**『眺めのいい部屋』『モーリス』の
 フォスター＝アイヴォリーの三部作・最終章が
 4Kデジタル・リマスター版で再び――**

情感ゆたかに美しく人生を描き、現在のイギリス映画界でただひとり正統派の作品を手がける名匠、ジェームズ・アイヴォリー。『眺めのいい部屋』『モーリス』と20世紀初頭の優雅な上流社会を舞台に、時代や社会の束縛から逃れ、自分に素直に生きていこうとする若き主人公の姿を描きつけてきたアイヴォリーが、三たび、E・M・フォスター文学の映画化に挑戦した。フォスター文学の最高峰として名高い『ハワーズ・エンド』である。

◆また、チラシによれば、本作の見どころは次のとおりだ。

ハワーズ・エンド邸をめぐる、 翻弄される美しい姉妹の恋

理知的な姉と感情的な美貌の妹——同じ理想をわかち合いながら、違う生き方を選ぶふたりのヒロインをめぐる、女と男、理想と現実、貧しき者と富める者、自然と都市といった、時代を越えた対立が走馬燈のように映し出される。物語は、映画の中で象徴的に流れるベートーベンの「運命」のように、幾重にも広がりながら美しい調和を迎えていく。

また、自然や精神世界への憧れ、ハワーズ・エンド邸が持つ不思議な魔力など、目に見えないものの存在を信じ、すべてを受け入れていくルース夫人の生き方は、マーガレットへと受け継がれていく。それはやがて、人々を結びつけ、幸せにしていく。この物語は、瞑想的な心のあり方に、真実の希望があることを、閉塞的なイギリスの階級社会に生きる人々の愛憎のうちに描き、共感と呼んだ。1910年に書かれ、『インドへの道』にも書かれたこの原作の精神は、今なお新しいテーマなのである。

ソロの『モーリス』から交響曲『ハワーズ・エンド』へ——人間模様を巧みに織りこんだこの映画は、アイヴォリーの円熟の極みであり、ヴィスコンティの絢爛たる世界に通じる傑作として、深い感銘を呼びおこすことだろう。

◆そして、チラシによれば、本作のストーリーは次のとおりだ。

本当の愛を知り、人は素直になっていく

知的中流階級で理想主義的なシュレーゲル家と、実業家で現実的なウィルコックス家。正反対な両家は旅行中に親しくなり、シュレーゲル家の次女ヘレンは、田舎にあるウィルコックス家の別荘、“ハワーズ・エンド”に招かれる。美しい田園風景と人々の歓待に囲まれ、ヘレンは次男・ポールに一目惚れ、ふたりは恋におちる。ヘレンは姉に宛てて「婚約しました」と綴る。この手紙の行き違いによる大騒ぎで物語は幕を開ける。

運悪く、ロンドンのシュレーゲル家の向かいにウィルコックス家が越してきた。失恋の痛みは癒えたもののヘレンは彼らに会おうともしない。しかし、穏やかな姉、マーガレットは、老夫人ルースと親しくなった。現実を合理的に割り切るウィルコックス家の中で、ただひとり魂や自然の声に耳を傾けるルースとマーガレットは、血のつながりを越えて深くわかりあった。死を前にして「ハワーズ・エンドはマーガレットに」という遺言を残して逝ったルース夫人。しかし遺言はもみ消された。

その後、マーガレットは残された夫、ヘンリーと結婚しウィルコックス家へ、ヘレンは、ヘンリーの失策から失業したバスト氏と、同情のあまり一夜をともにしてしまい、シュレーゲル家は崩壊してしまう。階級や立場を超えて、人は愛しあうことができるのだろうか？

◆本作では、何よりもまず、姉マーガレット・シュレーゲル（エマ・トンプソン）と妹ヘレン・シュレーゲル（ヘレナ・ボナム＝カーター）との、何ゴトにおいても全く対照的な性格と価値観、そして生き方に注目！そして、また一貫して本作のストーリーの底を貫くハワーズエンド邸に注目！さらに、映画の中に何度も登場する芸術論、文学論と共に姉妹の運命を暗示するかのようなベートベンの交響曲第5番『運命』の響きにも注目！4Kデジタル・リマスター版でこんな名作を鑑賞できたことに感謝！

2019（令和元）年10月28日記